あさ 8

2019

夏木蔭トラココルヌトウス滑空す

木靴を履き向日葵描く聖書かな

石佛の崩れし眼窩燕住む

蔦攀ぢる居酒屋にボルガの舟唄

ユトリロの墓この辺り葡萄園

どろんどろんと蒙古の落暉かな

払暁のモーツアルトに似し蜩

絵と俳句・関合正昭

あと

八　月

須賀忠男

雑詠

東京　佐藤　喜孝

約束やつぎつぎ葉櫻燕の子

三角形やはり臺形春の富士

水平線氣に入って描け春夕焼

圍から一歩踏み出す虞美人草

茶柱のかはり猫の毛春をはる

白あぢさゐコトバを足して子守唄

すぐそばに骨のある皮へちま水

宇佐江真理讀んでて月を見そこなふ

石川　定梶じょう

昼がほの沖

置いてある土管覗けりけふ令和
貯水池の水の緊張黒揚羽
満てばひき引いてはみちて火の螢
針使ふことを男のこ子桜桃忌
もののものし昼がほの沖護衛艦

東京　須賀　敏子

夏の旅

信濃路や蔵ある家の大夏木
宿坊に低く飛び交ふ夏つばめ
七十路やガーデン巡る夏の旅
松蝉やほったらかしの湯に入る
さくらんぼ骨折の肘庇ひつつ

東京　田中　藤穂

六月

コンビニで眼科医に逢ふ夏はじめ
石楠花へ曲る細道三輪車
紫陽花に触れては笑ふあんよの子
夏帽や東京駅の変り様
梅雨冷のビル牧場にフラミンゴ

三重　長崎　桂子

青嵐

街路樹を総嘗めて過ぐ青嵐
駐輪場大方倒す青嵐
人影なき宿場の石碑青嵐
青嵐電柱西へ傾けり
久方の友とゆるゆる花菖蒲

東京　森　なほ子

梅雨の花

蔓ばらのフェンス初めて降りる駅
紫陽花の毬を掴んでみる子かな
雨に散る紅ばらの横白あぢさゐ
南天の花ひっそりと満開に
枇杷染の布を織る人緑さす

東京　赤座　典子

六月

太陽を四角に見する夏霞
ポニーテールと赤いパンプス風薫る
緑さす鉄平石でけんけんぱ
出欠の返信遅し額の花
いくたびも席を譲られ六月果つ

埼玉　秋川　泉

梅雨の日々

香水のただよふ文をもらひけり
痩せこけの猫見送りて走り梅雨
豆ごはんぷっくり炊けし雨の朝
筍の天婦羅さくり夕餉膳
日の暮れて紫陽花の青浮き上がり

埼玉　大日向幸江

梅雨

光燦々図書館の曝書せる
亡き犬と歩いた土手に夏兆す
後れ毛を風に遊ばす薄暑かな
梅雨晴れや箪笥一棹断捨離す
道端に夏大根の花の咲き

東京　七郎衛門吉保

雪笹

雪笹を緑濃く茹で緑雨かな
笹団子バナナのごと剥く半夏雨
五百円の硬貨と比ぶさくらんぼ
貴石のごと光を反すゼリー羹
どんよりを気分転換プラムジャム

東京　篠田　純子

ミニ牧場

夏のアルパカ刈られアルパカらしきは頭
夏のアルパカ頭のみふさふさ逆上せまいか
毛を刈られ夏のアルパカアンバランス
夏のアルパカ反芻の首細し
インカムに機密情報草いきれ

佐藤　恭子

佃島

踊の輪東亜未の手足ながれゆく
ゆったりとあいづち踊の宵深む
猫の顔狐の顔浮く踊の輪
かすれゐし声ものどかに盆踊
盆三日川に上げ潮さざれなみ

前月抄

もつれあふ足湯の指と春日ざし　佐藤喜孝

バッティングセンターの快音神輿過ぐ　篠田純子

地震の予感春月涸井戸へ及び　定梶じょう

子規庵の畳に正座夏めく日　須賀敏子

時を経て濃くなる昔木下闇　田中藤穂

十六個顔を覗かせた黄水仙　長崎桂子

四阿に街の音聞く薄暑かな　森なほ子

カステラのざらめを刮ぐ立夏かな　赤座典子

雨ふくむ若葉匂ひて改元す　秋川　泉

万緑や鋼叩かれしなやかに　大日向幸江

温泉の町や食事難民十連休　七郎衛門吉保

憲法九条水盃といふお酒　佐藤恭子

喜孝抄

エイマ

六月号作品より　赤座典子・七郎衛門吉保・佐藤喜孝

野遊びや漢字のやうな山と川　佐藤　喜孝

童話「漢字のお話」ある日エイマちゃんはお爺さんと、山と川の見える野原に野遊びに出かけました。お爺さんは棒切れで地面に山の形を描きました。これを漢字だと「山」と云う字になります。次にお爺さんは地面に川の形を描いて、これを漢字だと「川」と云う字になります。と景色と漢字のお話をしました。「漢字って面白くて分かり易いね」エイマちゃんの感想でした。（吉保）

ひとしとは似てしなるものひおしがり　佐藤　喜孝

普通　何の疑いもなく使っている「ひ」と「し」が、入れ替わって記憶されている。それが喜孝さんの言葉に時々現れて、ひとしきり盛り上がったりします。この句を、ゆっくりと詠んで「ああ　あの時のことだった」と気が付きました。下五の言葉は，他にも沢山ありそうです。次はどんな言葉に会えるのでしょうか。（典子）

春闘の闘を忘れて平成尽　七郎衛門吉保

わたしは個人経営だったので春闘で戦ふ相手が居なかった。新聞やテレビで賑やかな闘ひ？お祭りを傍観してきた。

新宿西口のばんやき「ぼるが」の主人はこちこちの共産党。五月一日はメーデー参加者に午後から店を開ける。わたしもプロレタリアートの端くれ。ぼるがにでかけて青蔦のそよぐ中、静かな店内で酎ハイを飲む。昼酒ほど贅沢はない。その内、流れ解散の労働者が店に入ってくる。邪魔にならぬやうここらで私は退散。平成といはず昭和の頃から「闘」の字のことは忘れてゐた。吉保さんはいまの春闘に歯ぎしりしてゐるやうだ。（喜孝）

蝋紙に鉄筆花の句会報　篠田　純子

「がり版」という言葉を、久し振りに思い出しました。務めていた頃、趣味のサークルのニュースをがり版で印刷していました。蝋紙を破らない様に，枠からはみ出さない様に、一定の力で注意しながら、書き込んでいました。私の縦書きの字は、その時の面白みのない、四角張った字のままな気がします。でもこの句の会報は、花の季節にふさわしく、伸びやかで美しい字で書かれていることでしょう。（典子）

葱の花落第坊がいとほしむ　定梶じょう

葱坊主は　一見行儀よく整列しているようですが、中には少し斜めに伸びたり、花の開きが遅れていたりしているのが紛れていたりします。そういう葱坊主を、わが身にあてはめて、親近感を持っ

て見ている子供。落第坊という響きは、可愛らしいですね。その可愛い坊やは、何に落第してしまったのでしょう。（典子）

「道新」に包まれ届くアスパラガス　　須賀　敏子

我が家にも、「新潟日報」とか「神奈川新聞」とか「信州版」とかの新聞紙に包まれて、地の野菜とか果物が送られてくる。包まれた中味は勿論嬉しい。同時にしわくちゃになった新聞紙を手で伸ばし、その記事からローカル感を受ける楽しみもある。また、水気十分な状態で包まれてくる、乾燥を防ぎ新鮮さを保つ、先達の生活の知恵にも驚嘆する。句の「道新」の一言がいい。（吉保）

春の河原五平餅売しづかなり　　田中　藤穂

四月清瀬吟行の折に「花の下五平餅売る爺しずか」と詠まれた句を推敲されたのだろうか。この他の参加者からは「花の昼口をよごして五平餅」「花冷やまずは出来たて五平餅」「五平餅旨いと花見そこそこに」が作句された。そこで、四句を簡易な短冊に写し、営業を続けられていた屋台にお届けしたところ、大変喜ばれた。物静かなご主人の対応が強く記憶に残っている。（吉保）

小動物蠢く如き春の雲　　長崎　桂子

動いている雲は、本当に色々な事を想像させてくれます。一気に何かの形で現れたかと思うと、

徐々に消えてしまう。二度と同じ形にならない雲、その時は、作者に、栗鼠や兎などのかわいい動物達を、次々と見せてくれたのでしょう。今度は何かしらと待ちながら、わくわくと楽しい時を過されたのですね。（典子）

春昼やちり紙交換ゆるゆると　　森　なほ子

戦後間もない子供の頃には、掛け声や鳴り物の合図とともに、羅宇屋・研ぎや・金魚風鈴屋・竿竹屋・屑屋・豆腐屋・納豆屋などがいた。その多くはリヤカー・荷車・自転車などで路地や裏通りをゆるゆると抜けて行った様には、風情があった。時の移ろいにその多くは消え、大音量スピーカーからの、ちり紙交換や物干竿に変わっていった。それも今は古紙交換と変わっている。（吉保）

子と遊ぶヒジャブ姿の春景色　　赤座　典子

町で民族衣装の人に出会ふと嬉しくなる。自国の衣裳を誇るでもなくさりげなく着、颯爽と日本の町で生活してゐる。これからはもっともっと多くなるらしい。子供は特に可愛い。典子さんはこんな町の光景を「春景色」と捉えた。賛成である。（喜孝）

花舞ひて芳紀十八猫の跳ぶ　　秋川　泉

泉さんの飼われている猫は、なんと御年十八歳。大変な長命で、普通なら活発な動きをする事は

ありません。それなのに、はなびらを捕まえようと、突然跳び上がりました。この快挙に「芳紀」という称号?を送った泉さん。ユーモア抜群ですね。（典子）

真っ赤なトラクター跡継の田起こしす　　大日向幸江

「赤いトラクター」で知ってることは唯一つ、小林旭に同名の曲があることぐらい。その曲の映像を見ると四・五十年前の曲のようだ。当時の農業振興策の一つのようにも見える。ネットでトラクターを見てみると、その大半は赤色であった。緊急車両でもないのに何故赤色?跡継ぎをはじめとした、農業従事者の農作業意欲を高める色なのだろうか。（吉保）

レモン　　須賀敏子

我家はお酒を飲む習慣が無いので、食後に果物を食べる。嫌いな果物はないが、葡萄の季節が好きだ。種類も多く洗ってそのまま出せるのが良い。古くからあるベリーAやキャンベルが好きだが、この頃はあまり見かけない。

夏山に持って行くのはスライスしたレモンに蜂蜜またはグラニュー糖をまぶしたもの。疲れた体にはたまらないおいしさです。

定梶じょう

『七日粥』

『富山雲母の会』に所属していた昔。お名前、どうしても出てこないのですが、その方は当時八〇歳に近かったでしょうか、脳卒中を患ったことがあって右手に不自由が残り、その筆遣いのため投句票を幅広に切ってあったのでした。

その方、終戦間際まで漢文の教師として師範学校に勤めてらしたそうで、のちに父上のあとを継いで住職になった。ですから、投句の時の筆記でも、かつてはさぞかし、と思える書体。句会も、その方の庫裡で行われることたびたびあり、小さな寺でしたが奇麗に整理された感のある書院でした。

さてその方。中国古典文学を専攻なさったわけですから、私たちにとり実に有為な時間を与えてくれたのでした。呉音のこと漢音のこと、あるいは音読和読のこと、などなど。その中で「一、二、三、四」、数詞について今記憶にとどめていることを書きたいと思います。

私達は現在、呉音で「いち、に、さん、し、ご、ろく、しち、はち、く、じゅう」と読むのが普通ですが、四は「よん」と読んだり七は「なな」と読んだり、九も「きゅう」と読むこともある。そもそも基本的な日本語読みでは「ひ、ふ、み、よ、いつ、む、なな、や、ここの、とお」、それを越えると「とあまりひとつ」「とあまりふたつ」などと遣ったそうですが今は置いといて、漢音では「いつ、じ、さん、し、ご、りく、しつ、はつ、きゅう、しゅう」と読んだ。「よん」や「なな」は日本語読みですから私達は、日本

語音と二種類の中国音を数詞として混用していることになります。そんなことを教わってのち、〈三に四を足して七なり七日粥〉を句会に投句することがあって、披講者が「七なり」を「しちなり」と読み、原句者の私が「ななり」と読んでいることに気がついて、さすがに披講なさる方は交ぜ読みをしない、違う、と感心したのでした。「さん、し」は中国語音であり、「なな」は日本語音。因みに「七日」は、「なぬか」の読みが正則のようで、平安とその前後に多数現れ、現在も関西では多く使われる、という。東京では「なのか」の読みが優勢、と辞書にあります。

掲句〈三に四を足して七なり七日粥〉に深い意味はありません。「なぬか」の音を引き出したいために上句を措いた、それだけに過ぎない。当たり前のことですが、つまらぬと思った人は入点しないしあゝ面白いと思った人は点を入れる。点が入ったか否かは記録に残していませんが二十数名の句会参加者で一点か二点は入ったような記憶があるのですが。

甲州葡萄

田中藤穂

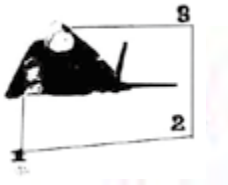
父母の故里が山梨県なので秋になると葡萄が送られてきた。木箱を開けて籾殻の中から房を取り出すと辺りが散らかる。甲州ぶどうは大粒で色は薄紫だがひつこくない優しい甘さが美味しい。今はブドウもいろんな種類が出てきて外国産のものも加えると選ぶのに迷うほどですが、あの昔ながらの懐かしい甲州葡萄もいつまでも世にあって欲しいと願っているものの一つです。

定梶じょう

秋川　泉

庭の枇杷今年限りの実を食ぶる
梅雨深し枇杷伐採の朝迎ふ
枝も葉もつめし枇杷の木梅雨の月

◎一句目。食べる、よりも熟れた、とする方が。
庭の枇杷今年限りの実が熟るる
◎二句目。止むを得ずの伐採。その朝を迎えてしまった。
◎三句目。「枝も葉も」とありますので、「(枇杷の)木」はなくもがな。
枝も葉も伐りつめて枇杷梅雨の月



田中　藤穂

在五忌のスカイツリーの灯りけり
前を行く人の曲線銀座夏
七夕竹老人ホームの食堂に

◎一句目。あのスカイツリーに在五忌をとり合わせることの意外さ。「灯りけり」も凡のようで凡でない。スカイツリーの灯ともし頃と業平の忌日。関わりがないようでやっぱりないのですが、何かがありそう。

◎二句目。「句中に〈人〉を使うときは気を詰めろ」とは、かつて教わったことの一つ。気をつけろの意。概して省略した方が成功する率が高い。

銀座夏曲線美が前行きにけり

◎三句目。事実を直載に言うことも大切ですけど、一つずらすことで句が面白くなります。

食堂や老人ホームの星祭

篠田　純子

団扇にて曲舞の所作信長忌
一点にひかり集まり山田植う
大王烏賊に追はるる夢へ明易し

◎一句目。本能寺の変は6月2日、新暦では7月。と、まあ私の理解できるのは此のところ迄で、舞いについては一切分りません。しかし良い俳句は、ことばの端々、ことばの気色で分かるもの。「うちはにてくせまひのしょさ」の措辞が充分その働きをしている。ですから、「信長忌」が坐っているかいないかはこの句の場合坐っているとしなければならないのです。

◎二句目。優れた状景句。ことに「集まり」がいい。少し以前なら田植定規を使っての手植えですから一層苗の一つ一つにひかりが集中した。しかし機械植えでもそう違いはない。山田ですからなお一層。

◎三句目。飛躍大胆。季語の坐りも思わぬ処。うまい。もしかしたら純子さん、「（追はるる夢）へ」の措辞に一瞬違和を感じたかもしれませんが、読み慣れたら何でもないこと。

赤座　典子

梅雨空もものかはハーフのアスリート
半時の天日であり蛇の衣
梅雨晴の湯島聖堂宥座の器

◎一句目。「ものかは」は文語的和語。「ハーフ」は俗っぽくて口語的な和製英語。「アスリート」はれっきとした英語。
◎一句目。「蛇の衣」が実に効いてます。それも、少しのあいだ太陽がかかった時の蛇の殻ですから一層季語の働きが大。
◎一句目。「宥座の器」は、金属製の壺状の器のことなんだそうで、孔子が「いっぱいに満たして覆らぬものはない」と、無理や慢心を戒めた。そんな時に使ったという。その器具が湯島聖堂にあったということなんでしょうね。「梅雨晴」だから「宥座の器」が生きた。

森　なほ子

ビニ傘の相合傘の浴衣の娘
北国の湊祭や雨の中
浴衣の子ビニ傘さして行く出店

◎一句目。「ビニ傘」はビニール傘のこと。例えば「テレビ」は、正格には「テレビジョン・セット」といった筈ですけど今は「テレビ」としかいいませんので、俳句に遣ってもさほど抵抗感がありませんが、「ビニ傘」は俗っぽい言い方。口語を駆使する川柳には宜しいが俳句にはどうでしょう。
◎三句目。「ビニ傘」が口語的かつ俗っぽい言い方のわけですから、正格を遣って、
浴衣の子ビニール傘をさしてけり
ならいいわけです。

大日向幸江

夏帽子拾いてよりのお付き合い
夏草の茂みに隠す捨て猫や
梅雨寒の優先席のハイヒール

◎一句目。「お付き合い」。口語的な措辞。無理に文語をつかう必要はありませんが、と言って「ビニ傘」や「お付き合い」は全くの俗言。国語辞典には「誼(よし)み」「厚誼」「交誼」等々、真っ当なことばがたくさん掲載されています。
◎二句目。「隠す」。作句者を消したい。

夏草の茂みに隠れ捨て猫や

◎三句目。優先席に乗車の「ハイヒール」を取りあげて、作者にだからどうした、という考えはないでしょう。ここのところはめりはりをつけたい。

梅雨寒し優先席のハイヒール

須賀　敏子

誘はれて能路金剛の夏怒涛
日傘閉じ銀座のビルの映画館
クーラーを少し強めてミシン踏む

◎一句目。能登金剛にいらつしやったんですね。今年は台風の到来が遅かったため凪ぐ日が多かったのですけど、少し風が吹けば必ず怒涛になります。
◎二句目。日傘を閉じて映画館へ入るのも出て開くのも平凡な景ですが、出て開く方が面白くないでしょうか。

日傘開く銀座の映画館を出て

◎三句目。句は五音、七音、五音で構成されて、一概に言えぬことですけど、後になる程ことばの意味は重くなる。掲句でも

ミシン踏むクーラー少し強めけり

と置いた方が。敏子さんがミシンを踏むことを主体にすべき、と考えていらつしやるなら原句のままで可ですけど。

長崎　桂子

梅雨深む草木受け入れ陰を増す

風の道探りつつ行く夏落葉

溝浚治療の話口口に

◎一句目。「草木受け入れ」が巧み。但し、「深む」「受け入れる」「陰を増す」のように動詞が多すぎますので、工夫を。

青梅雨や草木受け入れ陰を増す

◎二句目。抑揚を付けたい。

風の道探りつ。行けり夏落葉

◎三句目。「治療の話」は口語に片寄りますね。

溝浚診療のことロロに

佐藤　喜孝

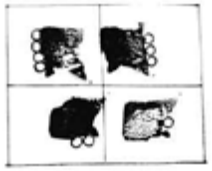
もう月はどこかへ去って暑いだけ

小学校の女先生浴衣かな

匕首は九寸五分とか鬼蜻蛉

◎一句目。喜孝さん一流の俳句。月が落ちてのちの夜助けの景ととろうとも半月が落ちた真夜中の景ととろうとも、月が見えなくなってのちに暑さが募る、この感じ方は独特。

◎三句目。日本最大のとんぼにあいくちをイメージ。普通の作者なら「九寸五分なり」とするところを「九寸五分とか」と置いて一つずらす。巧まずして巧む。

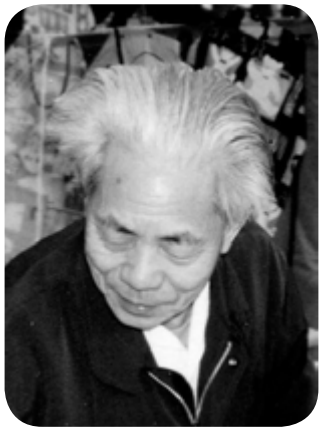


バナナ

大日向幸江

枇杷、サクラン坊と初夏の果物が店頭を飾る。夏を代表するスイカ、メロンも好きだ。最近よく見る南国の物はまだまだ手が出ない。でもバナナは別。子供の頃、病気になると食べる事ができた。とにかく好きなものが多く優劣がつかない。

中川句寿夫さんをしのんで　一



売薬の一夜の宿やとろろ汁

出来秋の米で買ひたる内証もの

初霰牛買ひが来て納屋覗く

秋愁や広貫堂の置きぐすり

干してある作務衣と現の証拠かな

蓮の実が飛んで和服を着てみたし

明け方の夢があいまい父の日よ

補聴器を外して風船かづらかな

障子貼ることも世辞いふことも下手

春暁や猫と話をしてをりぬ

石森理和　抄

畑・畠

菊畑経てきし風に香のありし　田中　藤穂
坪畑一線区切る芝桜　関口　ゆき
みそはぎの濃き色に出し屋敷畑　竹内　弘子
吊橋は畑へ行く道雲の峰　石森　理和
ふり返る畑に霜のつぶやけり　渡邉　友七
小糠雨とまと畑につづれさせ　佐藤　喜孝
無造作に大根刺したる大根畑　佐藤　喜孝
金の日と金の佛塔黍畑　佐藤　喜孝
大根の葉の青々と畑濡れ　田中　藤穂
柚畑無人の駅の軍畑　石森　理和
月光の散り敷く畑茄子光る　長崎　桂子
トマト畠生まれそこねた子が一つ　鎌倉喜久恵
白玉や母はいつでも畑にゐし　鈴木多枝子
田の仕事終へしか案山子畑に立つ　早崎　泰江
鳥騒ぐ刈り残されし蕎麦畑　早崎　泰江
畑にシャベル突つ立てしまま土凍る　竹内　弘子
傾くづれのキャベツ埋め込むキャベツ畑　渡邉　友七
切畑や日のあるかぎり蕎麦の花　長崎　桂子
秋収め田畑に笑顔ありにけり　竹内　弘子
畑つもの霜を被りてあまくなる　佐藤　喜孝
遠景の桃畑近景の桃の花　長崎　桂子
ふかふかと踏む田畑に芽ぐむもの　石森　理和
茶畠に風車が廻りあたたかし　定梶じょう
陽気なるガイドと歩くお花畑　須賀　敏子
木枯に土けぶり上げ野菜畑　鈴木多枝子
ふくらみぬ天まで続く茶の畑　須賀　敏子
妖怪はここには棲めぬ麦畑　石森　理和
麦秋と云ふには小さき畑一枚　鈴木多枝子
畠仕事してゐるあかいちゃんちゃんこ　長崎　桂子
舎人線菜の花畑の上通る　田中　藤穂
薯畑遠くアルパカ草を喰む　須賀　敏子
犬麦も混じりて風の罌粟畑　田中　藤穂
物置を遠まはりして茄子畑　鈴木多枝子
鶏頭の畑を縁取る赤さかな　須賀　敏子
冬の汗足腰達者にみかん畑　藤野　寿子
寒の内田畑の色はビニール色　長崎　桂子
菜の花黄さとうきび畑ふちどりぬ　赤座　典子
桃畠枝くぐりゆく雲のおと　佐藤　喜孝
上空に乱気流あり花菜畑　田中　藤穂
軽やかにおしやべりな風花菜畑　芝　尚子
色紙買ひ雨畑硯洗ひけり　藤野　寿子
カーセールス蜜柑生り年畑に来る　藤野　寿子
みかん畑継ぐ農大出陽ざし濃し　藤野　寿子
燈台が見える畠の八つ頭　定梶じょう

段畑の海に迫り出す水仙花　鈴木多枝子
冬菜畑工夫こらせし鳥おどし　早崎　泰江
明日香村寺の際まで春の畑　篠田　純子
アパートの窓にあるのは南瓜畠　佐藤　喜孝
桐の花野菜畑の真中に　長崎　桂子
海見ゆる蜜柑畑の花匂ふ　鎌倉喜久恵
緑雨きて畑の色合水彩画　長崎　桂子
畑焼くも対の家鴨の逃げ出しぬ　大日向幸江
育ちよし悪しきも交り花菜畑　山荘　慶子
一時間一本一輌冬菜畑　石森　理和
雪解水水路満たして畑にまで　長崎　桂子
耕作を継がぬ畑に菜花咲く　須賀　敏子
焼畑の煙車内に梅雨の明　赤座　典子
うしむまとひとのゐぬ畑灼けてをり　佐藤　喜孝
うり坊の玉蜀黍畑に消えて行く　大日向幸江
秋冷や田畑乾びる黄金色　長崎　桂子
野菜畠ぬけて彼方へ梅雨の蝶　山荘　慶子
夏畑柵の向かうに慶良間鹿　須賀　敏子
闇おりて西瓜畑に動く影　秋川　泉
父の村唐黍畑の風の音　田中　藤穂
田も畑も光あふるる霜の朝　大日向幸江
東御苑の中の茶畑夏の雲　田中　藤穂
木犀の音立てて散るめうが畑　森　なほ子
入り江の青沖のうす青花菜畑　森　なほ子
空埋めてマグリットの雲葡萄畑　大日向幸江
年始よふ畑の野菜買いに行き　長崎　桂子
旧正や畑に作付の男にっこり　須賀　敏子
茶畑の畝の連なり富士に雲　石森　理和
離れ住む妹ひとり夏畑　鈴木多枝子
柿畑どの木も撓わ人気無し　篠田　純子

旗

秋の寺風林火山旗古りぬ　芝　尚子
陳情の旗の卯の花腐しかな　栢森　定男
駅伝の声援に振る初国旗　関口　ゆき
桃実る茶店の旗は武田菱　須賀　敏子
旗立てて柊二が里の鮎の梁　赤座　典子
真夜中の国旗と国歌虫すだく　芝宮須磨子
どこにでもアメリカ国旗桐一葉　定梶じょう
彼岸桜お稲荷さんの赤い旗　堀内　一郎
萱折つて掲ぐ弔旗のごと靡き　定梶じょう
桜咲くはて何々の日か国旗立つ　田中　藤穂
屋上の市旗がへんぽん花祭　森山のりこ
球児らの汗の顔々優勝旗　定梶じょう
春一番黄旗はためく中華街　山荘　慶子
雁わたる貨車の連結旗をふり
春ならひ街に並びしレッズの旗

表紙

スマホで撮った写真を初めて使ってみた。私道の脇が一寸ほど舗装から逃れてゐる。ここを訳を知らぬが毎年種類を違へて草が生える。今年は罌粟が一並びに生えた。そして花が咲き実を付けあっといふ間に枯れてしまった。次はいつどんな草が出現するのだらう。

（喜孝）

あとがき

「中川句寿夫さんをしのんで」

中川句寿夫さんが逝かれてまごまごしてゐるうちに三回忌が過ぎてしまった。二〇一六年十二月十六日のことであった。マイペースとは云っても今少ししっかりして欲しい。とどなたも思ってゐる事だらう。おゆるし下さい。みなさんからの原稿を借りて句寿夫俳句をゆっくり噛みしめ、我々の句風を少しでも広げられればとおもってゐる。

二〇一九年八月号
発行日　八月十七日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）